

Title ▶ いのちがけでやってくる

写真=稲葉俊郎

先日、子どもが生まれました。予定日より1カ月早かったのですが、満月の影響でした。6月の満月はストロベリームーンと呼ばれる特殊な満月で、月の位置が低いために赤く見える特殊な満月でした。女性の月経は、月の暦と密接に関係しています。月は地球の中心から38万5000km(地球半径の約60倍)の距離に位置しています。宇宙空間に浮かぶ遠く隔たった天体と人体とが相互作用を起しているということは不思議なことです。また、地球は秒速466m、月は秒速4.64mで自転していて、地球は秒速29.8km、月は秒速1kmで太陽の周りを楕円軌道で回転(公転)しています。これほど高速で地球や月が動いていることも不思議ですし、その上で月の暦と月経とが対応していることは神秘としか言いようがありません。人間の生命は、こうした月のリズムをともなった排卵により、支えられています。満月は海水を引っ張る力として潮の満ち引きにも影響していますから、母体にも深い影響を与えています。月は、そうして地球の生命を見守ってきました。

子どもの出産に立ち会いましたが、生まれてくる時の赤ちゃんは、明らかに自分の意思で生まれてきていました。自分の頭の大きさと外への唯一の通路である子宮口の大きさとの関係から、自分で絶妙なタイミングを図って計算しているように見えたのです。自分自身が安全で確実に外に出られることと、母体への影響を最小限にすることのバランス。早く外に出たいという思いと、いやいやもう少し中で成長を待たなければという思い、そういうあらゆる要素をすべて考慮に入れた上で出てきているように思っています。月のリズムで訪れる陣痛という母体のうねったリズム。コントロールできない月の力に大きく動かされながらも、できる限りの自分自身の力でタイミングを図っているように見えました。

母体から外の世界に出てくる時も、体が出ることができるよう、精妙に巧妙に体を回転させ、最善の体のポジションを時々刻々と必死で模索しながら、命がけでこの世界にやってこようとしていたのです。その光景に、ただただ心を打たれ、感じたことがあります。忘れてるだけで、人は誰もが命がけで生まれてくるのだ、と。忘れてるだけで、人は誰もが強い意志と勇気を持って生まれてくるのだ、ということ。人生の始まりは、自分と母体との命がけの行為から始まるのです。いのちがけで、生まれてきますが、生まれたらそれで目的が終わるわけではありません。生まれたての赤ちゃんはとにかく弱いのです。だからこそ、周りにいるすべての人が守り育てる必要があります。食事や排便も睡眠も、すべてが完全介護です。だからこそ、人の生命は、愛を核にして成立していると改めて思います。生きていることは、生き残っていることでもあります。愛されなければ、誰もが生き残ることはできないのです。

生まれた直後の赤ちゃんは、血が通う前に青色で血の気が引いているように見えます。急速に血液が通うようになり、血液が全身に廻ることで「赤ちゃん」へと劇的に変化します。赤色は、生きている証しそのものです。

赤ちゃんはオギャーオギャーと泣きますが、泣くことは息をすることで



赤ちゃんの変化を日々見つめるのが、稲葉先生の日課に

もあり、自分という存在を確認しているかのようでもあり、「ここに自分がいるのだ」という主張のようにも聞こえます。「ただ存在している」という存在のあり方に、こんなに感動するのは不思議なことです。

赤ちゃんは、一秒一秒進化しているように見えます。数十分、数時間で顔がどんどん変わり、体の動きの質も変わっていきます。魚のように波打ちながら、全身で呼吸をしています。体は部分へと分離・分割していかず、全体的な一つの統一体として当たり前のように使っています。

生命線である母乳を吸う行為も、あらゆる技術を総動員させる必要がある極めて大変な営みです。吸う動作は思っている以上に複雑で、ノドの動きから口や頬の動きまで、誰にも教わらないままに命がけで習得します。失敗を恐れず、少しずつ懸命に学習しながら、確実に目的へと向かっています。こうした「いのちがけ」の行為に、食の原点を感じます。

赤ちゃんは、数分ごとに数時間ごとに寝たり起きたりしています。巨大な無意識から頭一つ飛び出すように、意識と無意識は不安定な中でバランスを取りながら、ある塩梅を探しているようです。その中で、あらゆる外の世界を学び続けながら、無限に広がる内的世界との接点を探しているのだな、と思います。

赤ちゃんを見ているだけで飽きません。それはおそらく過去の自分自身と出会っているからでしょう。自分自身が一秒一秒進化してきて、今ここに存在しているというプロセスを。そのことで、人は誰でも今この瞬間にも一秒一秒進化し続けている、ということ思い出すのです。自分がしてもらったことは、自分がする側に回ること思い出せます。人は誰もが大切にしてもらった弱い時期があるからこそ、誰かを大切にしている行為を介して、生の原点を思い出さなければならないのです。そうして、自分自身の存在の輪もつながるのです。

Profile



稲葉俊郎

いなばとしろう。医師。東京大学医学部付属病院循環器内科助教。東京大学医学部山岳部の監督、潤沢診療所の所長(夏季限定山岳診療所)も兼任。さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造形も深い